

家族会と共に歩む



《 特集にあたって 》

家族の生の声が聴こえる場「家族会」

1994年に国際連合の総会にて、『国際家族年』が制定されました。スローガンは「家族：変わりゆく、世界における資源と責任」です。ここには「社会の福祉を確保するため、家族が中心的な役割を担う」と明記され、家族問題にかかわるあらゆるレベルの活動を奨励するとあります。家族自身が変革に参加することを目指し、家族に関連する問題（不況、貧困、HIVなど）を家族とともに乗り越えていこう！という呼びかけがその背景にありました。

あれから30年、家族はどのように変化したでしょうか。日本では少子高齢化に伴う人口の減少、家族員の縮小から家族構造の衰退、ジェンダー役割・結婚観・子育て観の多様化によって、家族の価値観や家族文化にも変化がみられるようになりました。私たち看護師は、その時代から派生する社会状況のなかで「家族」とのかかわり方を模索していかなくてはなりません。社会の最小単位として存在する家族だからこそ、看護師には家族との協働関係をナチュラルに成立させる技術が必要になるでしょう。

そのため本特集では「家族会と共に歩む」と題し、家族会の紹介を企画しました。前半には家族会の特徴と私たち看護師がどのようにかかわればよいか、家族会の支援のあり方を含めてご紹介します。後半は日本の家族会（小児親の会）と、家族によって組織化された支援団体をご紹介します。家族会は大小含め、世界には星の数ほどあるといわれます。今回は疾患ごとに紹介しているため、病院ごとの家族会や、同一の疾患でも目的が異なる家族会など、十分にお示しできていない

ことはご容赦ください。家族会がどのような意図で設立し、何を目指して活動し、そこに参加する人たちは何を得ているのか、全国の家族会を知る機会にしていたただければ幸いです。日本の小児疾患に関連した家族会と私たち看護師が互いに情報を共有し、小児看護のなかで今後の家族会の支援について、是非考えてみてください。

現在、家族会という場は、私の看護の道標となっています。白衣を脱いで当事者から聴いた生の声は、医療者としての私に新たな気づきを与えてくれました。家族の語りは一人の人として大切な視点を教えてくれます。家族が自由に声を出せる場こそが「家族会」であり、生の声を聴ける場が「家族会」だと思います。家族会の場に、一歩足を踏み入れてみませんか。

『国際家族年』に設立した一般社団法人日本家族看護学会は今年で30周年を迎え、9月に開催される第31回学術集会では「家族会企画」を開催いたします。「いま、語り合おう！専門職と家族のコラボレーション」と題し、全国の家族会の方々が自由にディスカッションできる場が提供されます。疾患や設立背景、会員の属性などが異なっても、家族がなぜ「会」を設立し、そこに集うのか、そこには家族だからこそ共感できる何かがあるのでしょうか。皆さまも是非、その場で「家族の生の声」に触れてみませんか？きっと新たな看護のヒントをもらえるかもしれません。

井上玲子 *Inoue Reiko*

東海大学大学院医学研究科看護学専攻家族看護学領域教授